



HOSEI SPORTS INFORMATION MAIL MAGAZINE

法政スポーツインフォメーション
メールマガジン

高橋 晃太 監督 プロフィール

神奈川県出身。2007 年法政大学経営学部経営戦略学科卒業。コーチを経て2013 年監督就任。東急電鉄株式会社勤務/東急東横線運転士。お父様は、現在、法政大学洋弓部の OBOG 会会長。

法政大学 洋弓部の特徴

「競技の初心者が大半で、推薦入学もなくリクルーターもないので、新入生歓迎会でメリットを積極的にアピールし、如何に関心を持ってもらえるかが勝負です」

「部員は理系・文系やキャンパスに関わらず在籍。物理的に大変な部分もあるでしょうが、勉強と折り合いをつけ、練習しています」

「正練(公式練習)は週3回ですが授業優先なので強制ではありません。正練以外でも靖国神社内の練習場が使える、近隣の有料施設もあるので、予定を合わせた部員が集まり自主練をしています」

「部は3年生幹部が中心になり運営していますが、指導のためのマニュアルがあります。練習で大切なことは、“基本に忠実に”とにかく“射つ”こと。筋トレも行いますが、日常行わない“矢を射つ”という動作の反復が大事だと考えています」

女子は関東大学1部、男子は2部に降格したとはいえ、強豪校の一つには違いない。監督の指導の下、学生中心に切磋琢磨しているのが、法政大学洋弓部の特徴だ。



「部での経験を単なる思い出にしないために」

～ 監督としての“解”を求めて、学生と歩む ～

体育会では2番目に新しい洋弓部だが、昨年には創部60周年を迎えた歴史のある部である。そんな古くて新しい部の高橋監督に、将来を見据えたお話を伺った。

「2019 年4月から体育会に加盟しましたが、サークル活動が体育会になったからといって、部の雰囲気は急に変わる訳ではありません。『楽しくやる』ことは基本的には良いことですが、やる気があって一生懸命やっている学生が、楽な方へ安易に引きずられてしまうことがないよう、その点は注意してやっています」法政大学の洋弓部は、他校の監督たちから「法政さんは、皆さん、仲がいいですね」と言われるほど和やかな部だそうだが、それで試合に勝てるわけではないことは、監督が一番、分かっている。

「今の学生は、精神論的な話には興味を示しません。文書に落とせば理解してくれるものの、行間の理解力には個人差が出てしまい、気付いてくれた学生にばかり仕事が集中してしまう傾向があります」「幹部の学生には『ただ競技をやるだけでなく、この団体行動を通じて人間的に成長してもらいたい』ということを話しています。彼らと私の考えがマッチしない時には、何度も、話し合いを行います」何が適切な指導方法なのか、高橋監督は日々自問自答しながら取り組んでいるようだ。

「今春、男子は2部へ降格となり、相当に悔しがっていました。この気持ちを忘れず、これからも頑張りたいと思います」「人一倍頑張る学生に刺激を受けて、他の者も頑張る雰囲気が継続できるよう、サポートしていきます」「部員それぞれ、課題は異なるので、一人一人としっかり向き合っていきたいと考えています」監督としての決意が垣間見えた。

アーチェリーという競技

初めて聞く方には驚きだろうが、オリンピックなどで見るアーチェリー競技(「ターゲット」と呼ばれる種目)は、的が70m先にある。驚くほどの遠さだ。その他 50・30・18mの種目もあり「学生達は長い距離を射ちたがりますが、短い距離で基礎を固める事も大切で地道な努力が必要です」「特に初心者の場合には、道具(弓矢)が道具なだけに安全の最優先を心掛けています」と強調された。ちなみに「未経験者にはイメージや必要な体力、基本的な動きを教えます。トレーニング用のゴムチューブを使い、基礎的な動きの習得に努める一方で、「立ち・構え・引き」などを細かく区切りながら教えていきます」やはり、指導方法はしっかりと確立されている。

応援に行こう

「応援席は、選手達の待機場所の後ろになります」「団体戦では各大学が特色を出し、的に当たった時には「よっしゃ」とか「ナイスショット」など練習中と同じ声を出したり、「まだ時間はあるよ」とか「落ち着いていこう」などと言ったりしています」また、「弓を取りに行く際には、校歌を歌ったりします」個人戦は静かだが、団体戦での声出しはいいそうだ。そして「何よりも応援は力になります」とも語られた。

競技の「ここに注目」

「上手い選手は、軽く引いて軽く放つ。力感を全く感じさせません。力む選手と一番力が抜けている選手を探したりするのも、面白いと思います」「弓を引く時の「静」と、的を射る「動」の動きも楽しめます」「遠い“的”に刺さったかどうか、分かりにくいので、スコープ(双眼鏡)をご持参ください」

「楽しさ」と「規律」に心を砕く

お父様が洋弓部OBでもある高橋監督。競技歴を伺ってみると「剣道を中学まで、吹奏楽(トロンボーン)は高校まで続けました」大学入学後は地元のオーケストラで活動される一方、洋弓部でも活躍。音楽とスポーツの二刀流だった。ただ「母も父と同様、アーチェリーをやっていたので道具や写真が自宅にあり、影響はあったと思います」そして「父とは今でも洋弓部談義をしています」とも。

現在、洋弓部の指導者は高橋監督一人だ。「コロナ禍前には、合宿や月に何回かOB・OGが来てくれましたが、数年のブランクが空き、今では部への関りが薄れてしまいました」と少し寂しそうに語られた。「ただ、学生の主体性と規律を重視しながら、もっといい方向に、といつも考えています」と学生への思いは熱い。

「洋弓部の部員が「4年間楽しかったです。ありがとうございました」と語る以上の“人としての成長”をして欲しいと思っていますし、部で得た社会性や人間性をもって、卒業してほしいと願っています」「私自身、「言われたことはやる」のは当然ですが、「周りのために働く」という指導を受けてきたことが、今でも良かったと思っています」「部という組織を通じて、各自がコミュニケーション能力を高めることは、社会に出てもきっと役立つと確信しています」

最後に「競技で大切なことは何か？」を尋ねてみた。「私の場合、「大事なことはこれだ」というポイントを置かないことです」と伺ってびっくり。「完璧を求めるスポーツですが、完璧は求めない、点数の高望みはしない。つまり、その時の自分のコンディションや状況を受入れるということです」少し、難しくなってきた。

「的を外せば、落胆します。試合前に「自己ベストを超えたい」と誰もが考えますが、ミスショットでそれが難しくなると、引きずられて、どんどん調子を崩してしまうことはよくあります。そうならないためにも、結果・ミスを受入れ、切り替えること。心の冷静さ、リラックスしている状態を保つ事が大切です」「試合は、選手一人一人にとっては個人戦、自分との戦いなので、試合経験が少ない選手には周囲が見えません。ただ、周りとの連携がないと自分の殻に閉じ籠ってしまい、パフォーマンスも落ちてしまいます」「そんな時にこそ、仲間の顔を見て我に返る」「こうした、選手を後押しするムード(空気)は非常に大切で、選手と周囲との連帯感や一体感のある大学は、やはり強い大学です。法政としてのムードを、私達も試合会場で出せるようにしたいと思っています」

「負けに、不思議の負けなし」高橋監督が好きな言葉の一つだ。「勝負に対する執着心」が、日頃の練習から学生に強く芽生えれば、もっとチームは強くなると感じたインタビューだった。



アマチュアスポーツは「和して勝つ」仲の良さはきっと強みになるはず